

# ジンバブエ JOCV 隊員機関誌 『MAGAZIM 42号』より

～笑顔が生まれる場所～

土方 愛

(16-1, ジンバブエ, 養護, 東京都立多摩養護学校)

ここジンバブエに来て、“ヒジカタは脱力した”と、よく仲間内で言われる。特に、同期のゴクエ M 隊員に何度も言われると、その裏には皮肉が隠されているのか？などと、少々勘ぐってしまうが。何れにしても、ヘロ～ッと（良い意味で）力が抜けていると、自分自身でも感じる。ヒジカタをそうさらしめたのは、他でもない、このジンバブエの人と大地とに限る。

赴任先の養護学校の子どもたち、スッタモンダあった大人たちをはじめ、この1年と9ヶ月の間に、実に様々な人々と出逢う機会を得た。勿論、多くの日本人ボランティアが同様であるように、ヒジカタもここに来て初めて“マイノリティーとしての自分”を経験したわけで、出逢いの全てが心地良いものとはばかりは言えなかった。アジアの女性と見れば、「結婚しよう」「日本へ連れて行け」と言い寄って来るニヤけた若い男たち、また物や現金をくすねるような汚いやり方に、頭に来て警察に行ったこともある（勿論、ジンバの警察は何もしないが・・・）。人を信用することの難しさを知っただけに、信頼できる人の存在自体が非常に貴重・希少であった。

そんな（好ましくない）状況のなかでも、子どもたちの言葉や行動には、ハッとさせられることが度々。常に、“この子たちは、いつから大人になってしまうのだろう？”とその成長を憎らしくも感じていた。今日は、ヒジカタの出逢った、愛すべき子どもたちを紹介したい。

配属先の教員はこの国の例にもれず、いろいろと問題を抱えている（そして悲しいことに、年々状況は悪化している）。授業中に教室にいない、授業をしない、子どもを前にパンを食べお茶を飲んでいる、そして体罰も度々起こっていた。また休憩中には、子どもに自分の持参したお菓子を売らせて、小遣い稼ぎをしている教員もいる。全盲の少年ノレストもまた、キャンディーやピンキー（ラムネ菓子）を持ってよくヒジカタの所へも売りに来た。「ハパナ・マリ（お金ない）」が私の口癖であり、結局一度も買ったことはなかったが、ある日彼に聞いてみた。「ノレストは何でミス・チフリ（担任）のお菓子を売っているの？彼女から、お菓子やお金が貰えるの？」そして、その予期せぬ答えは、「もっと勉強したいから、これを売ってミス・チフリにお金が入れば、バス代になって彼女がもっと学校に来られるでしょ」　こんな言葉を子どもに言わせて、この国の大

人はそれでいいのか？！ミス・チフリがこの言葉を聞いたら、彼女は果たして恥ずかしいと思えるのだろうか。いやきっと、したり顔で「センキュー、ノレスト」くらい言ってしまうんだろうな。

車イスの女の子ニャーシャは、大きな身体でいつもヒジカタをギュッとハグし（抱きしめ）てくれる。最後の日も、「日本に帰るの」と言うと、ハッとした表情で今までで一番大きなハグをしてくれた。彼女は障害故、話すこともスムーズではないが、思い出したように「日本のハズバンドは元気？」と時々聞いてきていた（ごめんねニャーシャ、彼とはお別れしたと言ってなかったね）。最後に答えてもらったアンケートでも、『ヒジカタに一言』の欄に“男の子ひとりと、女の子ふたり！！”と、ヒジカタの家族設計まで心配してくれていたもの。この国に来て、家族への愛、家族のつながりの深さを実感した。現在の日本ではなかなか見られない家族の姿が、ここジンバブエにはある。そんな彼らの姿を目の当たりにして生まれて初めて、“家族がほしい、子どもがほしいな”と思ったヒジカタは、やはり矛盾した非常識な人間なのだろうな。

上記のような教員の状況で、校長や同僚ともぶつかること度々。なかでもデンドレとは、校長室で「聞きなさい」「あんたが、聞け！」と言合いを繰り返した張本人。「アイに子どもの前で辱められた」「授業中に自分のサザを作っている」・・・と、お互いの言い分はまったくかみ合わない。ことの成り行きは別として、最終的には彼女のヒジカタや子どもに対する態度は変化した。当初はヒジカタを見下すように笑うこともあったが（後になって分かったが、実はヒジカタよりずっと年下だった）、その後の授業には協力的であったし、“辱められた”と嫌がっていた（子どもの前で歌う）ことも、ぎこちなくも挑戦していた。考えてみれば、赴任初日にタウンのバス停まで一緒に帰ったのもデンドレだったな。そして活動最後の日、彼女がヒジカタに送ってくれた言葉 “We meet to part and we part to meet. （別れるために出逢い、出逢うために別れる）” 使い古されているような言葉だが、こうやってジンバブエの人は、人と出逢い、そして（死も含め）人と別れていくのだな。

車イスの男の子レスリーは 14 歳だが、現在グレード 3（小学校 3 年生）。当初は就学猶予（入学を遅らせること）なのかと思ったが、ある日彼の家まで一緒に帰ってその理由が分かった。レスリーはザンビアで生まれ育ったザンビア人、勿論ショナ語も理解しない。3 年前に一家が交通事故に遭い、両親を亡くし彼自身も障害を負った。一人っ子だったレスリーは、その後伯母と二人で学校近くのフラットに住んでいる。その話を聞いたときに、何と言って良いものか分からず、“I m sorry about it.（お気の毒に）” というと “It s OK.” と笑って答えてくれた。彼の明るい “It s OK.” には何度も救われた。そうだった、レスリーはじめ現地の人々の “オーケー” に、ヒジカタは受け入れられて来たのだった。

赴任後、すぐにヒジカタにくっついて回っていたのは、全盲の少女ヴィジニアであった。人懐っこい笑顔で、ヒジカタの膝にのって来たり、全身をペタペタと触り回したり（彼女はブラジャーに興味を持っていたな）。名前を聞くと「マギダギダ」とファミリーネームを答えるが、実は彼女には両親がいない。ジンバブエでは珍しくもないが、彼女もまた孤児の一人である。しかも親に置き去りにされ施設で育った。幸い孤児の“子どもの家”の養いの両親によって、学校に通うこともできる、孤児のなかでは稀な存在と言える。帰国前のある日、彼女の家を訪ねることが出来た。生後間もない双子から、近隣の学校に通う小学生まで、約 60 名の子どもたちが寝食を共にしていた。主に国外の教会からの寄付によって運営しているそうだが、スタッフは皆ジンバブエ人。子どもを捨てるのもジンバ人なら、その子たちを育てるのもまたジンバ人。木陰で、同じく全盲のアンジェリンとお昼のサザを食べる姿が、厳しい状況に生まれた子どもたちに訪れた平穏を物語っており、非常に印象的だった。

ジンバブエの状況は、外国人の私たちから見ても悪化していると感じる。そして今後も回復の兆しは見えない。「どうしたら良いのだろうか？」と現地の人に聞くと、最終的には「祈るだけ」と学ある人もそう答える。平均寿命が三十代であろうと、インフレ率が 1000 パーセントであろうと、それでも人々は笑っている。そのことは良くも悪くも非常に印象的であった。

果たして、私たちは彼らと同じように笑えているのだろうか。ヒジカタは自分の心の闇も認めて、ここジンバブエの地で笑ってきたのだろうか。きっとその笑顔もヒジカタをへろへろと脱力させた理由の一つなのだろうな。そしてヒジカタもまた、ジンバブエの人々に笑顔をもたらせたのだろうか。

最後に あなたは笑っていますか。そしてあなたの大切な人は、笑っていますか。  
with love

